

## 東アジア世界における交流の様相

### ～中国を見据えた韓半島・朝鮮半島と日本～

担当講師：小林 健彦

#### はじめに：

日本列島の中では、文字情報、文献資料に依って確認を取ることが可能な、古墳時代以降の時期に限定してみても、隣接する韓半島・朝鮮半島（以下、半島と略すことがある）との間では、数々の人的・物的な交流や交渉等が行なわれ、そのことを以って倭国・日本の政治的システム、及び、古代国家体系の構築、技術、文化、生活水準の向上に貢献して来たと評価をすることができる。それらが当初より意図されたものであったのか、否か、とは別の次元において、両者は物理的にも、また、精神的にも近しい関係を維持して来たのである。無論、その先には中国王権の栄枯盛衰、離合集散と言った動向をも見据えた形での交渉でもあった。大なり小なり、中国王権の動向を無視した形でこの課題を追究することには意味が無い。しかし、その両者の経緯を考へてみる時、白村江の戦い、刀伊の入寇、モンゴル襲来（元寇）、倭寇の活動や応永の外寇、文禄・慶長の役、そして、日本が近代化して行く過程において発生した、日本の対外膨張の結果としての半島や中国への進出、侵略等、といった（軍事的）侵攻、支配の対象・被対象であった、という意味合いも決して小さくは無い。

本講義では、日本、韓半島・朝鮮半島、そして、中国という、「北緯31～41度帯東西ライン上の交流、交渉」がいったい日本へ何をもたらしたのか、また、影響を与えたのか、または、そうでは無かったのかという視点に立ち、ヒントとなり得る個々の具体的な事象を指摘しながら、今日に至る交流、交渉の特質を考へてみる。

#### 1：越国（こしのくに）を通して見た東アジア世界

「越国」とは、律令制度の整備に伴う国郡制導入以前の日本において、現在の北陸地方と新潟県域等とを合わせた地域概念としてあり、その北限は漠然としている。国郡制の様な行政上の区画であるとは言うことのできない面もあるこの地域概念とは、ヤマトの王権があった畿内を越えて、北東方向へと向かう（越える）とした、ヤマト王権を中心として見た場合に於ける方角観であり、強力なる国家意志の発現した形での地域呼称であったも

のと見られる。それと共に、古代三関（さんげん）の1つである愛発関（あらかのせき。近江国と越前国との国境付近に置かれたとされる。福井県敦賀市。789年に廃止）の**結界領域**を越えてあちら側（異界）へ行くという、**都人に依る対空間認識**が表出した形での地域概念でもあろう。古代当時における**方角観の持つ重要性**を考慮するならば、**北東（東北）の方角観**とは、即ち、**中国思想由来の鬼門の方向**に当たるのであった。……………以下は講義で！

## 2：越国に残る東アジアの足跡（そくせき）

以上の経緯を持つ**越国**であるが、韓半島・朝鮮半島の東海岸北部～沿海州（プリモルスキー・クライ Primorskii Krai）という地域に着目をした場合、そこより日本の都があった畿内中央部にショートカットで短時間の内に行く際には、先に示した北部九州経由の日本政府推奨ルート（筑紫道）ではなく、**南海府吐号浦**等より出港して**丹後半島西海岸～若狭湾沿岸部**に着岸し、**久美浜湾**や**小浜湊**、または、**敦賀湊**より陸路**琵琶湖北岸**に進出し、**塩津**、乃至（ないし）は、**今津**の湖水に面した湊より湖水面交通路で南下して、比叡山延暦寺の門前町であった**坂本**や**大津**に至り、更に、**瀬田川**、**宇治川**、**木津川**水運で以って平城京北部に到達するのが日本官憲の目に留まる機会も少なく、早く到着することが出来ていたものと考えられる。事実、先の高句麗国使はそのルートを採用しようとしていたものと推測されるのである。……………以下は講義で！

### 2-1：越国に見られる渡来人の足跡

#### 2-1-1：須曾蝦夷穴（すそえぞあな）古墳

石川県七尾市能登島須曾町夕部21番地5に所在する、「**須曾蝦夷穴古墳**」（墳丘底辺東西約18.7メートル・南北約17.1メートル、墳丘最大高約4.5メートル、**横穴式方墳**、**古墳時代後期・7世紀中葉**）は、その構造や立地から検討し、韓半島等よりやって来た渡来人達の墳墓ではないかとの推測が成されている。この古墳では**2つの独立した玄室（げんしつ）**〔**東側の雄穴（おあな）**、**西側の雌穴（めあな）**〕を持ち、そこに通じる**羨道（せんどう）**は、夫々約7メートルと長い。ここからは、**木材の加工具**とされる、**ほぞ孔鉄斧**（韓半島での出土事例が多い）、**鉄鎌**、**木棺用の釘**、**砥石**、**須恵器**、**土師器**の他、**金環**や**銀象嵌（ぞうがん）**、**円頭大刀装具**、**鉄刀**等の副葬品も出土しており、当該被葬者は当地においても相応の待遇を以って処遇されていたものと推測をする。……………以下は講義で！

#### 2-1-2：大萱場（おおかやば）古墳

新潟県長岡市雲出町字大萱場にある**大萱場古墳**は、墳丘の基底部直径約15メートル、高さ約2.5メートル、幅約2.5～3メートル・深さ約50～70センチメートルの**周溝**を持つ**円墳**である。その築造は**7世紀初期**で**古墳時代後期**に当たる時期であると見られている。被葬者は以下に示した理由より、**渡来人**であるものと推測される。当該古墳の発掘調査は長岡市教育委員会が**昭和59年（1984）**に実施し、**墓室**（南北約4メートル、東西約

2メートル、深さ約70～90センチメートルの箱形)が、その側壁に厚さ約20センチメートルの礫と木炭、床にも礫と木炭とが混じった「横穴式木芯礫室」であることが確認された。その墓室内部からは、鉄刀、刀子、鉄鏃、銀環(耳飾りか)、ガラス製小玉(首飾りか)、水晶製切子玉(首飾りか)等の副葬品が発見され、周辺部からは須恵器の大甕、平瓶(ひらかめ)が出土している。つまり、当該古墳の被葬者の遺体は、死後に於いて「火葬」されていたのである。……以下は講義で!

### 2-1-3 : 気比(けひ)神社

「日本書紀 卷六 垂仁天皇」垂仁天皇2年(紀元前28)是歳条には、任那(ミマナ)人であった蘇那曷叱智(ソナカシチ。先代の崇神天皇の時に来朝したとあるが、新羅人がその帰国ルートを遮断した為に帰国が叶わないでいたらしい。新羅国と任那国との「怨」はこの時に始まったと記述を行なう)が本国への帰国申請を行なう旨が記され、その割書き部分において、「一云(曰)御間城ノ天皇(崇神天皇)之世ニ。額ニ有(ヲヒタル、ツヒタル)角人。乗一ノ船ニ泊于(トドマレリ)越ノ國ノ箭飯(ケヒ)ノ浦ニ。故號テ其處曰角(ツノ)鹿(都怒我)也。問テ之曰。何(イツレ)ノ國人ゾ也。對曰。意富(オホ)加羅國王之子ト。名ハ都怒我(餓)阿羅斯(ツノガアラシ)等。亦名(別称か)ハ曰于斯岐阿利叱智于岐(ウシキアリシチカンキ)ト。伝聞(ツテニウケタマハリテ)日本國ニ有ト聖皇(ヒシヒリノキミ)。以歸化(マウオモムク)之」とした記事があり、韓半島東南部に存在していた加羅諸国の内、高霊にあった大加羅の王子が、後の越前国敦賀郡気比社付近に一隻の船に乗ってやって来たとしているのである。……以下は講義で!

### 2-1-4 : 竹ヶ花集落

#### 2-1-4-1 : 謎の高麗船

鎌倉幕府が編纂したとされる記録書、「吾妻鏡」の元仁元年(1224)2月29日条には、「去年(1223年)冬比、高麗人乗船流寄于越後國寺泊浦。仍今日。式部大夫朝時〔北条(名越)朝時(北条義時の次男)〕。執進其弓箭以下具足於若君御方〔三寅丸(摂政・関白九条道家の三男藤原頼経)〕。(中略)帶一筋。以緒組之。彼帶中央付銀簡。長七寸。廣三(七)寸「方」也。其中注銘四字也。(中略)於四字銘者。文士數輩雖令參候。無讀之人云々 簡銘書様」という記事が掲載されている。幕府に依って接收されていた帶一筋に付されていたという「簡銘書様」の部分は、一見すると漢字に似てはいるものの、吉川本、島津本等の吾妻鏡写本に依っても微妙な差異があり、幕府のインテリ官僚でさえも解読することができなかつたとあるが、酒井中氏に依れば、明治時代にはそれが女真文字であることが判明したとする。更には、ロシア沿海州地方に所在する東夏国の塞加(シャイギン)古城遺跡においても、同種のパイザと呼ばれる銀簡、銀製の牌札が発見されたという。若しそうであるとするならば、当該高麗船(本講義では当該船を暫定的に高麗船と呼ぶ)はどのような目的を持って、何処(どこ)に向かっていた船なのであろうか。……以下は講義で!

## 2-1-4-2：竹ヶ花集落に残る伝承

ところで、新潟県燕市(旧分水町)中島竹ヶ花集落にある竹ヶ花山(標高約32メートル)は、古来、新羅国より渡来した王族の墳墓ではないかとされ、その頂上部には明治35年(1902)に、長善館(同燕市粟生津)主であった鈴木彦岳氏に依る碑銘を持つ「新羅王碑」が建てられた。長善館は儒教の經典である「礼記(らいき)」にその典拠を求め、天保4年(1833)、儒学者鈴木文台(ぶんたい)が開いた全寮制の私塾である。そこでは漢学、数学、英語等の科目を教授し、文台、惕軒(てきけん)、柿園(しえん)、彦嶽(げんがく)の4代の教員に依って約1,000人以上の塾生を輩出したが、明治45年・大正元年(1912)に閉館をしている。この集落に伝わる新羅王伝説の整備、普及には、私塾長善館の果たした役割が大きいのかもしれない。同碑より約30メートル程、南東方向へ下った場所には、渡来した初代の人物(渡来人)の墓所であるとされる小石柱が建てられているものの、文字等は刻まれていない。竹ヶ花山自体、また、この山頂部には古墳(円墳、前方後円墳)があるのではないかとする見解もあるが、私有地である為、現段階では発掘調査等は行なわれてはいない。……以下は講義で！

## 2-1-4-3：竹ヶ花集落の「新羅王祭」

毎年6月第2日曜日の午前10:00より、「新羅王祭」が竹ヶ花山の山上において行なわれており、当該集落の人々が墓守としての祭祀を今に至るまで連綿と継承しているのである。この行事の起源に関しては、竹ヶ花集落の人々の間においても判然とはしていない。しかしながら、上述した様に、私塾長善館の果たした一定の役割や影響が考慮されるのである。必ずしも竹ヶ花集落の人々が高麗船乗組員や新羅王族の末裔ということではないであろうが、そうした伝承が日本中世における韓半島先進地論に立脚したものであったとするならば、当地の人々がそれを受け入れ、現在に至るまで、祭祀を継続して来た理由が理解されるのかもしれない。例えば、西国の守護大名・戦国大名であった大内氏(山口を本拠地とする)が、自らの祖先を百済国の聖明王第三子である琳聖太子(りんしょうたいし)に求めていたことは、韓半島先進地論のロジックに分国内支配における利用価値を認めていたからである。推古天皇治世に百済国より周防国(すおうのくに)の多々良浜(山口県防府市多々良付近)に到着し、多々良氏を称したことからは、同氏が当地へ製鉄関連技術(たたら製鉄、古式製鉄法)をもたらしていたことが推測され、そうした地域貢献を基礎として、鎌倉時代にはその一族で以って国衙在庁をほぼ専有し、大内氏発展の基礎を形作ったのである。……以下は講義で！

## 3：新羅国の文武王と日本

新羅国の第30代文武王(在位661~681年)は名を法敏と言ひ、太宗武烈王金春秋の子として生まれた。金春秋は大化3年(647)に日本を訪れていた。それは、西隣に在った百済国の義慈王に依る攻勢を、王族外交を展開することに依って跳ね返そうとする

ものであったとされる。百済国に対する日本の伝統的な影響力を期待しての来朝であったものかもしれない。丁度、時期的には新羅国が中国より導入した**律令体制**を整備し、王権が確立しつつあった統一時代の入り口に当たった。**新羅国の文武王**は、在来の文化と中国文化とを融合させ、発展させた王でもあったのである。……以下は講義で！

#### 4：環境難民の発生と気候変動をめぐる東アジア世界

日本と新羅国との国家間関係の推移を見てみると、660年には唐・新羅の軍事同盟が成立しており、両者の連携した軍事作戦の実施に依って倭国が肩入れをして来た百済国は滅亡し、その8年後には高句麗国も唐の計略に依って滅亡した。更に、663年8月の白村江の戦いにおいても、日本や旧百済王族の**鬼室福信**、**王子豊璋**等を中心とした百済再興軍は唐・新羅連合軍に敗退し、それ以降、日本と新羅の国家間関係は、新羅・唐間の関係の度合いに応じて推移をして行かざるを得なかったのである。概して言うならば、当該期の日本と、新羅国との関係は、日本側の強硬で高圧的な姿勢、また、内向きな姿勢もあってか、私的な交易関係を除けば必ずしも良好であったとは言えない。しかし、そうした政治的な情勢とは別に、8世紀～9世紀にかけての時期には、なぜか**新羅国より日本へ渡来する人々も多く**、弘仁11年（820）2月には、**遠江国**、**駿河国**両国に在住していた、**新羅人700人**に依る**反叛**も発生しているが、彼らが移住を余儀なくさせられていたとは言え、この2か国だけでも700人もの新羅人が存在していたことは注目されるべきことであろう。……以下は講義で！

#### おわりに：

以上、本講義では幾つか視点を変えてみながら、**中国を見据えた形での韓半島・朝鮮半島**と日本との交流の様相を垣間見ようと試みた。日本近世以前の段階にあって、東アジアの東の涯（はて、果て）とは日本であった。それよりも東の世界は**扶桑**（ふそう。中国神話にある太陽の昇る木、転じて日本国を指し示す）であり、実在しない異域であった。それが江戸時代の幕末に至り、**鎖国体制・海防政策**の矛盾や限界を痛感し、更には、**アヘン戦争**における清王朝側の敗北（1842年8月、南京条約）を目の当たりにした江戸幕府は、急遽、**異国船打払令の停廃**と、**異国船に対する薪水食料の給与**とを決定し、それまでの**伝統的対東アジア観**を、実際の政策としても180度転換したものと見られる。**アヘン戦争における中国の敗退**が日本に与えた**衝撃**とは、計り知れないものであった可能性がある。それが既に時代の趨勢（すうせい）には合わなくなっていた官僚的・門閥的江戸幕府体制の寿命を縮めていた可能性すらあるのである。これに依り、古来、良くも悪くも中国王権の影響下にあった日本の行く先、活路を、太平洋の遥か東方に存在していた北米大陸に求めたのであった。この時点において、「**日本、韓半島・朝鮮半島、そして、中国という、北緯31～41度帯東西ライン上の交流、交渉**」のベルトは全地球規模のものとして、歴史上初めて東進してつながったのである。……以下は講義で！